

外国語科における思考力・判断力・表現力を測る評価問題の在り方に関する研究

— 高等学校入学者選抜問題の分析等を通して —

【研究者】 教科教育部 指導主事 福川 力

研究の要約

本研究は、外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価問題の在り方について考察することを通して、思考力、判断力、表現力等を育成するための、指導と評価の改善に係る示唆を得ることを目的としている。まず、外国語科教育における「思考・判断・表現」の捉えとその評価について整理し、中・高等学校外国語科教育における現状と課題を提示した。その後、高等学校入学者選抜問題に関して、技能統合型の評価問題に係る全国の状況及び技能統合型の評価問題の広島県における出題状況の推移について分析を行った。外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価問題については、技能統合型のテストが有用であること、評価問題の検討に際しては、コミュニケーションの目的・場面・状況を具体的に設定することや、情報や考えを理解したり、その理解に基づいて表現したり伝え合ったりする必然性のある課題を設定することが重要であることを示すとともに、技能統合型の評価問題に係る全国及び広島県における現状についてまとめることができたことが成果として挙げられる。

I 研究の背景と目的

本研究は、外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価問題の在り方について考察することを通して、外国語科において思考力、判断力、表現力等（以下、思考力等という。）を育成するための指導と評価の改善への示唆を得ることを目的としている。

平成31年1月21日に、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（以下、「平成31年報告」という。）が取りまとめられ、学習評価の改善に関する今後の検討の方向性として、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に沿った整理がなされることが示された。このように、思考力等は現行の学習指導要領から引き続いて、新学習指導要領においても育成が必要な資質・能力の重要な要素とされ、それらに係る指導と評価の充実・改善が求められている。

しかし、全国の中・高等学校の生徒を対象に行われた「英語教育改善のための英語力調査」や広島県高等学校学力調査の「活用問題」等の各種の調査結果から、生徒の英語力、特に思考力等の育成が十分ではない状況が指摘されている。

また、入学者選抜等の学力検査の在り方については、「高等学校入学者選抜について（通知）」（平成9年11月・文部省）に、「知識の量や程度を問う出題に

偏ることなく、例えば論述式の解答を求める出題や思考力・分析力を問う出題を増やす」とあるように、その改善については従前から求められてきた。外国語科においても、「今後の英語教育の改善・充実の方策について 報告」（平成26年10月・英語教育の在り方に関する有識者会議）において、「高等学校・大学へ進学を希望する者に関する英語力については、4技能からなるコミュニケーション能力が適切に評価されることを基本として、入学者選抜を改善していくことが重要である。」と示された。このような背景もあり、特に近年では高等学校入学者選抜問題等の学力検査の問題について、国立教育政策研究所教育課程研究センターの「各都道府県教育委員会の高等学校入学者選抜における思考力等を問う問題の出題例」や文部科学省初等中等教育局教育課程課の「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～」にも示されるように、思考力等を測るために適切な評価問題となるよう工夫・改善がなされてきている。

そこで、本研究において、文献研究や高等学校入学者選抜問題の分析等を行うことを通して、外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価問題の在り方について考察し、外国語科における思考力等の育成と評価の改善に寄与する示唆を得たいと考える。

II 研究の基本的な考え方

1 外国語科教育における「思考・判断・表現」の捉えとその評価について

(1) 現行及び新学習指導要領における「思考・判断・表現」の評価について

現行の学習指導要領における学習評価の扱いについて、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（平成22年）「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（以下、「平成22年報告」という。）において、「基礎的・基本的な知識・技能については『知識・理解』や後述する『技能』において、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等については『思考・判断・表現』において、主体的に学習に取り組む態度については『関心・意欲・態度』においてそれぞれ評価を行う」（下線部は筆者による。以下同様）と示されている。「平成31年報告」においては、「『思考・判断・表現』の観点に係る評価については、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価するもの」と示されている。これらのことから、「思考・判断・表現」の観点に係る評価については、現行の学習指導要領での評価の扱いが、新学習指導要領の下での評価においても踏襲されると捉えてよいと考えられる。

(2) 外国語科における「思考・判断・表現」の評価について

新学習指導要領において、外国語科で育成すべき思考力等とは、下の図1に示されるように、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、理解したり表現したり伝え合ったりすることができる力」とされている。

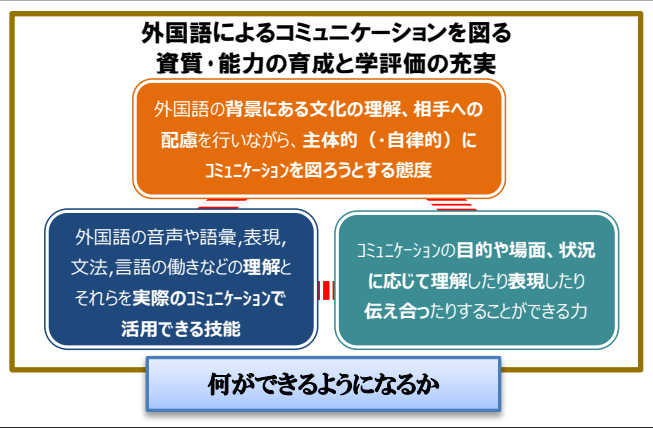


図1 新学習指導要領の考え方と外国語科で育成する資質・能力

そのため、「思考・判断・表現」に係る評価問題を作成する際には、コミュニケーションの目的・場面・状況を具体的に設定すること、情報や考えを理解し、その理解に基づいて表現したり伝え合ったりする必然性のある課題を設定することが求められる。

また、外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価について、松浦伸和（平成26年）は、言語活動のうちでも下の表1に示される「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」の観点で評価される部分に相当すると解釈でき、外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価とは、知識及び技能を土台としてそれらを適切に活用し、外国語を理解したり外国語で表現したりする能力を評価するものであると指摘する。

表1 現行の外国語科の評価の観点とその趣旨

観点	趣旨
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。
外国語表現の能力	外国語で話したり書いたりして、自分の考えなどを表現している。
外国語理解の能力	外国語を聞いたり読んだりして、話し手や書き手の意向などを理解している。
言語や文化についての知識・理解	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けているとともに、その背景にある文化などを理解している。

松浦（平成26年）は、国立教育政策研究所（平成23年）の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 外国語）」では、「読むこと」に関して、「外国語理解の能力」においては、「あらすじや大切な部分などを読み取ることができる。」「書かれた内容から書き手の意向を読み取ることができる。」「話の内容や書き手の意見などを批判的に読むことができる。」などが評価項目として示されており、これらの項目は、前者の2項目と後者の1項目とに大別できると指摘する。前者は、テキストで述べられている情報を取捨選択して取り出したり、そこに書かれている内容から書き手の意向や意見を読み取ったりする活動であり、後者は書かれた情報や意見に関して価値判断や評価をする活動であり、その力はPISA型読解力で求められている「テキ

ストの解釈」「熟考・評価」と重なっており、両者とも「思考・判断」を伴っていると考えられる。また、「思考・判断・表現」に係る評価に関する留意点として「平成22年報告」において、「基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動等において思考・判断したことと、その内容を表現する活動とを一体的に評価することを示すものである。」と述べられている。よって、「表現」とは単に考えなどを自由に述べるのではなく、価値判断や評価したことについて筋道を立てて論理的に表現することである。松浦は、その一連の内容を図2のように示している。

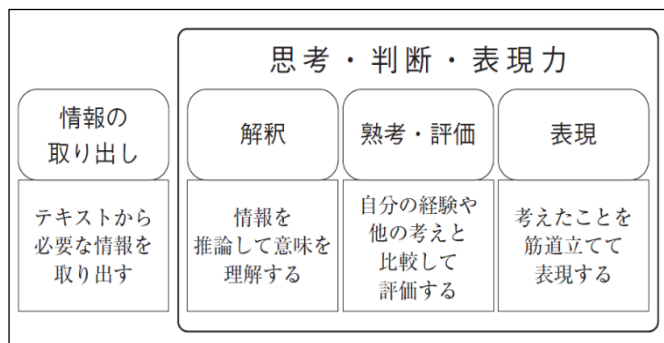


図2 「読むこと」における「思考・判断・表現」の解釈

したがって、外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価については、「聞くこと」や「読むこと」の技能を活用しテキストから必要な情報を取り出した上で、情報を推論して意味を理解し、さらに自分の経験や他の考えと比較し評価したことを基に、考えたことを「話すこと」や「書くこと」の技能を活用し筋道立てて表現することを求めるような、技能統合型のテストを用いることが有用であると考えられる。

2 中・高等学校外国語科教育における現状と課題

文部科学省は、「平成29年英語教育改善のための英語力調査事業報告」（平成30年）（以下「平成29年英語力調査報告」という。）において、全国の中学校第3学年の生徒約6万人（国公立約600校）及び高等学校第3学年の生徒約6万人（国公立約300校）を対象として、英語に関する4技能（「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」）がバランスよく育成されているかという観点から、生徒の英語力や学習状況を把握・分析し英語教育の成果と課題を検証した。

「平成29年英語力調査報告」では、生徒の英語力について、高等学校第3学年の生徒においては、高等学校卒業時の目標とされている CEFR（Common

European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠）の A2レベル（英検準2級程度）以上の割合が、「聞くこと（33.6%）」「読むこと（33.5%）」「話すこと（12.9%）」「書くこと（19.7%）」であり、目標の50%には4技能すべて達しておらず、特に「話すこと」「書くこと」は全体的に低いこと、中学校第3学年の生徒においては、中学校卒業時の目標とされている CEFR の A1上位レベル（英検3級程度）以上の割合が、「聞くこと（29.1%）」「読むこと（28.8%）」「話すこと（33.1%）」「書くこと（46.8%）」であり、目標の50%には4技能すべて達していないことが示されている。

こうした結果を基に、「平成29年英語力調査報告」では、中学校、高等学校のいずれにおいても現行の学習指導要領で示されている言語活動を十分に行っている学校の方が、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の得点が高く、特に統合的な言語活動を十分行っている学校の方が、「話すこと」「書くこと」の得点が高いだけでなく、「聞くこと」「読むこと」の得点が高いことが示されている。さらに、今後の指導においては、複数の技能を有機的に結び付けた、技能統合型の言語活動の一層の充実を図ることが強調されている。

また、「平成29年度広島県高等学校学力調査報告書」（以下、「平成29年度学力調査報告書」とする。）によると、広島県高等学校学力調査の「活用問題」等の調査結果からも、「活用問題」の通過率（A問題〔第1学年生徒対象〕42.0%）は、「活用問題」以外の通過率（同69.0%）に比べ低いことが示され、広島県の高等学校の生徒の英語力、特に思考力等の育成が十分ではない状況が指摘されている。

改善策として、「平成29年度学力調査報告書」では、読み取った内容について考え、何を伝えるべきか判断し、自分の言葉で相手に分かりやすく表現する力を育成するためには、普段の授業において、まとまりのある英文を扱う際に、情報や筆者の考えに対して評価を加えながら読み、自分の考えを表現させる活動を工夫し、伝えたい情報や考えなどを整理して理由とともに書く力を付けるための指導を継続的に行っていく必要があると示されている。

したがって、「思考・判断・表現」に係る評価を考える際には、定期考査等の日常的な評価でも、このような視点を入れた評価問題を作成し、実際に評価を行い、その結果を指導の改善に活用していくことが重要となる。

Ⅲ 高等学校入学者選抜問題の分析

1 入学者選抜問題の在り方

入学者選抜等の学力検査の在り方については、「高等学校入学者選抜について（通知）」（平成9年11月・文部省）にも、「知識の量や程度を問う出題に偏ることなく、例えば論述式の解答を求める出題や思考力・分析力を問う出題を増やす」とあるように、思考力等を問うことができるものになるよう、その改善については20年以上前から求められてきている。

また、「平成31年報告」においても、「新しい学習指導要領の趣旨を踏まえた各高等学校の教育目標の実現に向け、入学者選抜の質的改善を図るため、改めて入学者選抜の方針や選抜方法の組合せ、調査書の利用方法、学力検査の内容等について見直しを図ることが必要である。」と述べられている。

このように、入学者選抜問題についても、新学習指導要領において育成が目指されている資質・能力の三つの柱の重要な一つである、思考力等を適切に評価するものにしていくことが引き続き求められている。

2 技能統合型の評価問題の広がり

Ⅱ1(2)においては、外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価に関しては技能統合型の評価問題を用いることが有用であることを論じた。佐藤敬典（2017）は、技能統合型の評価問題とは、英語の4技能、すなわち「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を、それぞれ独立して評価する問題とは異なり、複数の技能を組み合わせで行うパフォーマンスを評価する問題であるとしている。また、技能統合型の評価問題が一般的になったのは、2005年にTOEFL（Test of English as a Foreign Language）がそれを取り入れてからであると述べている。日本においては、大学入学者選抜試験としても認定を受けたTEAP CBT（Test of English for Academic Purposes: Computer Based Testing）が、2016年から技能統合型のテストを取り入れている。このことは、多くの日本の高校生が、大学入学者選抜試験を通じて技能統合型の評価問題に触れる機会ができたことを意味すると佐藤（2017）は指摘する。

このように、技能統合型の評価問題が多く見られるようになったのには、複数の言語技能を用いることは、日常生活では多く行われることであり、そこで「英語を使って何ができるか」を測定するためには、同様のタスクを課す必要があると考えられてい

るからである。すなわち、より真正性（authenticity）のあるタスクを課すことが重要視されるようになってきており、英語の断片的な知識の有無や単独の技能の測定に留まらない評価が求められていることの表れと言える。このように、技能統合型の評価問題は、情報を処理してアウトプットにつなげるための思考力等を必要とするため、英語による「思考・判断・表現」に係る評価問題としてより真正性が高く、妥当性の高いテストであると言える。

3 高等学校入学者選抜問題の調査

(1) 調査Ⅰ 技能統合型の評価問題に係る全国的状況

ここでは、平成30年3月に47の都道府県で実施された高等学校入学者選抜試験のうち、「読むこと」と「書くこと」の領域を有機的に関連付け、読み取った情報を整理して再構成したり、読んだことを基に自分の考えやその理由を書いたりする技能統合型の評価問題がどれくらいの都道府県で出題されているか、また技能統合型の評価問題を設定している場合、どのくらいのレベルでの解答を求めるものかを調査した。

分析の視点としては、「書くこと」に関して、文での解答を求めるもの（以下、Sとする。）か、空所に数語を補充する形で解答を求めるもの（以下、Wとする。）か、そして、読み取った情報を整理して書くことを求めるもの（以下、Aとする。）か、読み取った内容に対する自分の意見やその理由を書くことを求めるもの（以下、Bとする）という点を設定した。

以下にその結果を示す。

① 技能統合型の設問を設定している	
都道府県の数	26/47
② ①の中でのS：Wの比率	21：5
③ ①の中でのA：Bの比率	5：21

①の結果から、55%以上の都道府県の外国語の入学者選抜学力検査において技能統合型の評価問題が出題されており、思考力等を測るための評価の工夫改善の取組が進んでいる状況が分かる。また、②及び③の結果から、解答の際には、語レベルのみの解答より文レベルでの解答が、大多数の都道府県で求められていることや、読み取った情報を整理して書くことに留まらず、読み取った内容に対する自分の意見やその理由を書くという、相手を意識した上での実際のコミュニケーションを想定した出題がより

一層重視されていることが分かる。これらの結果から、生徒の思考力等を育む観点から、高等学校入学者選抜を改善する取組が全国的にも広がっていることが見て取れる。

(2) 調査Ⅱ 技能統合型の評価問題の出題状況の推移

次に、技能統合型のテスト・思考力等を問う問題が年を追う毎にどのように出題されてきているのかを明らかにするため、広島県の高等学校入学者選抜試験における、平成10年から平成30年までの20年間で、技能統合型の評価問題がどの程度出題されてきたのかとその経年変化を調べることとした。「読むこと」と「書くこと」の領域を有機的に関連付け、読み取った情報を整理して再構成したり、読んだことを基に自分の考えやその理由を書いたりする技能統合型の設問がどれくらい見られるかを、5年毎に（平成10年、15年、20年、25年、30年）調査した。以下の表2にその結果を示す。

表2 「読むこと」と「書くこと」の技能統合型の評価問題の出題状況の推移

実施年 設問	平成 10年	平成 15年	平成 20年	平成 25年	平成 30年
大問構成 (設問数)	2・3 (2)	2・3 (2)	2・3 (2)	2・3 (2)	2～4 (3)
W or S (設問数)	S (1)	S (1)	W (1)	S (1)	S (3)
A or B	A	A	A	B	B

これらの結果から、平成10年、15年、20年においては、技能統合型の設問は1問のみであり、読み取った情報を整理して書くことを求める設問であったこと、そして平成25年、30年については、読み取った内容に対する自分の意見やその理由を書くという、相手を意識した上での実際のコミュニケーションを想定した設問となっていることが分かる。さらに、平成30年には「読むこと」と「書くこと」の領域を有機的に関連付ける設問を設定している大問が、それまでの二つから三つに増えていることが分かる。これは、現行の学習指導要領の完全実施を受けて、入学者選抜試験問題の内容が変化していることが原因だと考えられる。

佐藤（2017）でも、テストはそれぞれの時代における社会の中で重要だと認識されている能力・スキ

ルを測るものだという指摘がなされているように、これらの変化は、社会の変化及び学習指導要領の改訂に伴って、思考力等の育成とその適切な評価により一層重視されてきていることを反映するものであると考えられる。調査結果からも、この5年の間で大きく高等学校入学者選抜問題学力検査の内容に変化が見られたことが分かった。まさに「十年一昔」ならぬ、「五年一昔」という状況である。今後も、新学習指導要領の趣旨を踏まえたものにさらに変更・改善がなされていくものと考えられる。指導者側は、これからの社会の中で重要だと認識されている能力を十分に理解した上で、高等学校入学者選抜問題学力検査等において測られる力の変化も合わせて捉えつつ、日頃の指導と評価を常にアップデートし、それらの改善の取組を進めていくべきであろう。

Ⅳ 研究の成果と課題

1 研究の成果

外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価問題の在り方について考察することを通して、思考力等を育成するための、指導と評価の改善に係る示唆を得ることを目的として本研究を進めてきた。その結果、次のような成果があった。

- 外国語科教育における「思考・判断・表現」の捉えとその評価について整理することができた。
- 中・高等学校外国語科教育における現状と課題について整理することができた。
- 「思考・判断・表現」に係る評価問題については、技能統合型のテストが有用であること、その問題を検討する際には、コミュニケーションの目的・場面・状況を具体的に設定することや、情報や考えを理解することを求め、その理解に基づいて表現したり伝え合ったりすることを求める必然性のある課題を設定することが重要であることを示すことができた。
- 技能統合型の評価問題の全国及び広島県における現状についてまとめることができた。

2 今後の課題

- 今後の課題として、次の点が挙げられる。
- 技能統合型の評価問題について、優れた事例を収集し、外国語科における「思考・判断・表現」に係る評価問題の在り方について更に追究していくこと。

○ 技能統合型の評価問題を用いた「思考・判断・表現」に係る評価の実際における、生徒の学習到達度やパフォーマンスを適切に評価するためのルーブリック等の活用について、更に研究を進めること。

【参考文献】

- 英語教育の在り方に関する有識者会議（平成26年）：「今後の英語教育の改善・充実の方策について 報告」
旺文社 編（2018）：『2019年受験用 全国高校入試問題正解 英語』旺文社
- 国立教育政策研究所（平成23年）：「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 外国語）」
国立教育政策研究所（平成24年）：「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 外国語）」
国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成31年）：「平成30年度 各都道府県教育委員会の高등학교入学者選抜における思考力等を問う問題の出題例」
国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成30年）：「平成29年度 各都道府県教育委員会の高등학교入学者選抜における思考力等を問う問題の出題例」
佐藤敬典（2017）：「テストが測る能力・スキルの変化」『英語教育』第66巻6号 大修館書店
中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（平成22年）：「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」
中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（平成31年）：「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」
根岸雅史（2017）：『テストが導く英語教育改革 「無責任なテスト」への処方箋』三省堂
広島県教育委員会（平成30年）：「平成29年度広島県高등학교学力調査報告書」
深澤真（2015）：「技能統合的活動の評価」望月昭彦・深澤真・印南洋・小泉利恵編著『英語4技能評価の理論と実際－CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで－』大修館書店
松浦伸和（平成26年）：「英語科における「思考・判断・表現」の評価」『英語科における「思考・判断・表現」の評価に関する研究』公益財団法人 日本教材文化研究財団
望月昭彦（2015）：「ライティングと他技能との技能統合的活動の評価」望月昭彦・深澤真・印南洋・小泉利恵編著『英語4技能評価の理論と実際－CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで－』大修館書店
文部科学省（平成10年）：「中学校学習指導要領」
文部科学省（平成20年）：「中学校学習指導要領」
文部科学省（平成21年）：「高等学校学習指導要領」
文部科学省（平成29年）：「中学校学習指導要領」
文部科学省（平成30年）：「高等学校学習指導要領」
文部科学省（平成30年）：「平成29年度英語教育改善のための英語力調査 事業報告」
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成26年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 1」『中等教育資料』平成26年4月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成26年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 2」『中等教育資料』平成26年5月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成26年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 7」『中等教育資料』平成26年10月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成27年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 12」『中等教育資料』平成27年3月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成27年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 18」『中等教育資料』平成27年9月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成28年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 23」『中等教育資料』平成28年2月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成28年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 29」『中等教育資料』平成28年8月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成29年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 34」『中等教育資料』平成29年1月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成29年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 40」『中等教育資料』平成29年7月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成29年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 45」『中等教育資料』平成29年12月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成30年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 51」『中等教育資料』平成30年6月号
文部科学省初等中等教育局教育課程課（平成30年）：「思考力等を問う～高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例～ Vol. 56」『中等教育資料』平成30年11月号
文部省（平成9年）：「高等学校入学者選抜について（通知）」